

原 加賀 乙彦

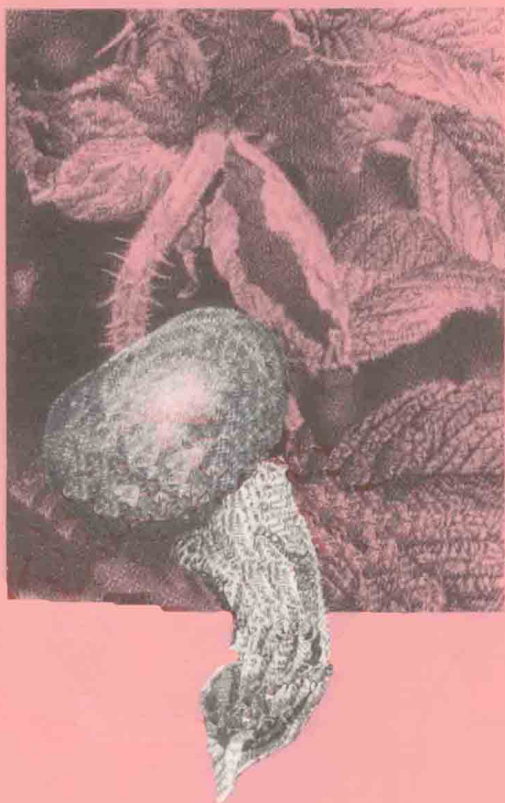
下



湿原

加賀乙彦

下



湿原

下巻

1985年 9 月30日 第1刷発行

1985年11月20日 第4刷発行

定価=1,500円

©Otohiko Kaga Printed in Japan1985
ISBN4-02-255392-8

著者——加賀乙彦

発行者——川口信行

発行所——朝日新聞社

編集：図書編集室

販売：出版販売部

〒104東京都中央区築地5-3-2

電話03-545-0131(代表)

振替東京0-1730

印刷所——凸版印刷株式会社

湿原

下卷…目次

春の氷	門	泥凪	寒郷	星	向日葵
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
419	309	199	153	93	5

装画：野田弘志
装丁：菊地信義

向日葵

タクシーから降りた阿久津純は目の前の建物を見上げた。Y病院と表札にある。コンクリートに煉瓦の飾り壁をあしらった一見マンション風の造りだが、背後に続く病棟の窓には鉄格子がはまっていて、いかにも精神病院らしい。玄関脇の花壇は、小振りの薔薇が何だかやけに几帳面に二列等間隔で植えられ、白と桃色との花が交互に開いていた。

どうしようかと阿久津は、花壇の草とりをしている患者の一团と指揮者の看護婦とを見比べつつ考えた。きのう拘置所に雪森厚夫を訪ねたあと勤め先の法律事務所にもどると、すぐ地図を調べ、さらに日本精神病院協会へも電話で問い合わせ、神代植物公園の近くにある精神病院はY病院だけだと確めた。電話ではうまくこちらの意図を伝えられない、ともかく行って見ようと、今朝は思い立ってここに来てしまい、まだ調査をどのように始めたものか作戦も立てていないのだった。

考えても仕方がない。当ってみよう、そう決心すると彼の脚はもう動き出していた。玄関を入ると幅広の廊下が待合室を兼ねていて、周囲に診察室や薬局や事務室が並ぶ。思いのほかの繁盛で、長椅子から溢れて立っている人もいる。看護婦や薬剤師がしきりと患者の名を呼ぶ光景は常の病院と変らない。阿久津は受付の窓口に進んだ。

「診察ですか」と抑揚のない事務調で女が尋ねた。

「いいえ」彼は咄嗟に答えた。「婦長さんにお会いしたいのですが」

「何婦長ですか」

「ええと……婦長さん、何人もおられるのですか」

「五人います。AからEまでの五つの病棟に一人ずつ」

「なるほど、その中に陽気な方おられますか」

「なんですって」女は阿久津の顔を訝しげに見た。精神病者を見慣れた、憐れむような表情で尋ねてきた。「一体どういう御用件でしょうか」

「一口には言えないのです」阿久津は言葉に詰った。ここで来院の理由を要約して言えないこともない。しかし待合室に満員の人たちに話が筒抜けになる。女はなおも疑わしげに阿久津の人相風体を見回した。胸の弁護士バッジに彼女は何の意味も見出さなかったようだ。阿久津は名刺を差し出し、「ある事件のことで院長にお会いしたいのです」と言った。弁護士の肩書が効果を顕わして女は奥で相談している様子、電話で院長を呼んでいる、そのうち女がドアの外に出てきて鄭重に先に立ち、二階の院長室に案内してくれた。

院長は、恰幅のよい五十年輩の人で、分厚いベッコウ眼鏡と糊の効いた白衣が目立った。横に禿げ頭の老人がいる。事務長だと紹介された。

「さてどういう御要求ですか」と、院長が緊張した面持で切り出した。その咎めるような口調と陰のある目づかいで、彼が何か勘違いしていると見て取れた。

弁護士がいきなり来訪したとなると、大抵の人は何かの落度で賠償金でも請求されるのかと身構えてしまう。阿久津は努めて笑顔を作り、来意を明確に告げようとした。

「実は、わたしが弁護人をしている事件の被告人のアリバイの証明のため、お宅の病院の婦長さんの証言がほしいのです」

「裁判ですか」院長は露骨に嫌な顔をした。「厄介ですな。うちの婦長はみんな多忙を極めてまして御要望にはどうも……」

「こちらの病院では」と阿久津は構わず続けた。「神代植物公園の四季折々の花を見に、患者さんたちを散歩に連れ出すことがありますか」

「それはあります。もつともそれは散歩ではなくて治療なのですが。『レク療法』と言ってます。レクリエーション療法ですな。花を見て精神衛生的気分転換をはかるのが目的です」

「大変すばらしい治療だと感服いたしました。こちらの病院は地の利を得てらっしゃる」

「はい」と院長はやつとにっこりした。「ここらは以前は一面の畑だったんですが最近住宅が増えました。でも、植物公園に行けば武蔵野の自然に出会えます」

「梅見なんかにも行きますか」

「もちろん。毎年の最初の行事が梅見です。それから桜、八重桜、牡丹、ツツジ、今頃は薔薇ですか。夏場は花が少ないですが、秋には萩、菊。そりゃもう患者の治療にはもってこいの環境です」

「なんなら入院しますか」というような愛想を見せて院長は片目を瞑った。

「梅見の件ですが、毎年いつ頃行きますか」

「年によって違いますよ」

「それはそうですね。たとえば一昨年などは、いつでしたでしょう」

「なぜ一昨年なんです」院長は再び警戒の色をあらわにした。

「率直に申しあげます。わたしの担当している被告が、一昨年の二月十一日の午後、建国記念の日ですが、神代植物公園の梅林で、こちらの病院の患者さんたちを見掛けたと言っているのです。その事実が証明できれば、本人のアリバイが成立するのです」

「一体どういう事件ですか」

「この前一審の判決があった新幹線爆破事件です」

「ありゃ過激派の犯行だ」院長は心から脅えた態度で、気味悪げに阿久津をジロジロ見た。

「この事件は冤罪なのです。とくに爆弾を列車に仕掛けたと見られる雪森厚夫、これがわたしの依頼人ですが、と池端和香子の二人にはアリバイがあるのです」

「過激派との係り合いはお断りだ」と院長は立ちあがり、出ていけと言うように顎でドアを差した。事務長も立ち、腰掛けたままの阿久津に追いつくような形で迫ってきた。

「どうか、もうすこし聞いて下さい」阿久津は坐ったままでいた。声は落ち着いているが顔に血がのぼり汗が吹き出してくる。何とか自分を抑えて言ってみる。「ともかく、人間の命がかかっているのです。雪森厚夫は死刑を宣告されました。しかし、彼にはアリバイがある。まだ証拠が不十分なので、その補強のため証人が必要なのです。もし、アリバイが完全に立証されれば、彼は無罪になる。そうなれば日本の裁判史上画期的歴史的な出来事になります。その光栄は、ひとえに院長先生の一身に輝きます……」

「ふうむ」院長は腰を下した。事務長も元に戻って腰を下した。

「あんた、失礼だが、本当に弁護士さんですか。ま、気を悪くなさるんで、あんまりお若いので学生さんが弁護士に化けたのかと思っていたところに、いきなり過激派の事件なんて言われたもんでびっくりした。いやあ、この病院も一時過激派の若手医師に占領されて、評判は落す、患者は減る、ひどい目に会ったんですわ」

「わたし本当の弁護士です。第一東京弁護士会に所属しております。何ならそこに電話なさってお確かめになってもよろしいです」

「いや、それほどまでしなくても……バッジをつけてらっしゃるので弁護士さんだとは分るんですが……調布のロータリー・クラブにも弁護士がおられるが、みんな年輩でバッジがくすんでる。そんなに金色燦然としたのは初めてで、いや失礼しました」院長は白衣のボタンをはずし、背広のポケットからハンケチを出して額の汗を拭いた。事務長もハンケチで禿げ頭を拭う。透かさず阿久津もハンケチを出し額や頬に当てた。三人で笑い合った。

「いつ弁護士になられた」と院長が尋ねた。

「去年です」

「そうでしょうなあ。若い先生だ。失礼だがおいくつで」

「二十六です」

「若い、若い、いいですな若い人は。学校はどちらで」

「C大学です」

「秀才学校ですな。うちの息子は来年受験ですが、C大なんて一流大学はとでも……」

「アリのパイの件ですが」阿久津は擦り抜けるように言った。「わたしの依頼人は、その日、お宅の患者さんたちが梅の花を背景に並んで写真を撮っていてその真ん中に小肥りの婦長さんがいたと言っています。陽気でよく笑う方で、患者たちから信頼され慕われていたそうです」

「誰だろう」と院長は事務長を振り返った。事務長は首を傾げて、重々しく言った。

「陽気でよく笑うという、B病棟の清水婦長ですか。E病棟の大浦婦長もよく笑いますが」

「うちの婦長はみんな陽気なんですよ」と院長は上機嫌で片目を瞑った。「みんな患者に信頼され慕われていましたな」

「その清水婦長さんと大浦婦長さんにお会いできませんか」と阿久津は言った。

「婦長を証人として呼びたいのですかな」

「いいえ。今の段階では、一昨年の二月十一日の午後、植物公園に患者さんを散歩に連れて行ったかどうかの事実をお聞きしたいだけです」

「それなら、まあ……」院長は清水婦長と大浦婦長に電話で連絡を取ってくれた。院長秘書の案内で阿久津は病棟に向った。

最初に会った清水婦長は、大柄な痩せた人で雪森厚夫の見た人ではなさそうだった。よく聞いてみると昨年の暮にこの病院に来たというので人違いと判明した。

二人目の大浦婦長は、背の低い肥った人で、何となく脈がありそうだった。阿久津が名刺を差し出すと、物珍らしげに彼の顔を眺め、「へえ」と嘆息を洩らした。

「まあ可愛い弁護士さん。わたし弁護士てのは年寄ばかりと思ってたわ。どうぞ何でもお聞きなさい。お役に立てれば嬉しいわ」

阿久津は手短かに用件を述べた。婦長は棚から「E病棟レク療法日誌」を取り出しページを繰ると「ええと、昭和四十四年ですか。二月の……十一日……全病院の患者六十三人観梅とありますわ」

「それは十一日の午後ですか」

「さあ……書いてないから、分らないわ」

「婦長さんも患者さんと一緒に行かれたんでしょう」

「覚えてないわ。わたしって駄目ねえ、何も覚えてないの」

「その日に記念写真を撮ったでしょうか」

「それも……分らないわ。でも、丁度去年がこの病院の創立十五周年で、院史を作るので、あの頃、院内の行事を写真に撮ってたから、もしかすると……」

婦長は同じ棚から「Y病院十五年史」を抜き出し、昭和四十四年のページに観梅の写真が載っているのを指差した。

患者らしい人たちが梅の花を背景に並んでいるが、写真が小さいうえに印刷の目が荒く、人の面影はぼんやりとしている。

「これがそうらしいんだけど」婦長は自信なげに呟いた。

「人の顔がはっきりしませんね」と阿久津は失望して言った。

「患者さんのプライバシーを守るために、わざとぼかしてあるんです。きっと元の写真はもっとはっきりしてますよ」

「元の写真をお持ちですか」

「さあ……写真を撮ったレク係が持ってるかも知れない。院史の写真は全部彼女が撮ったの」

「女の方ですか」

「そう。大学の心理学科を出た人で心理テストとレク療法を受け持ってるのよ」

「その方に会えますか……」

「さっき病棟に来たんだけど、まだいるかも知れない」婦長はガラス越しに広間を見渡した。

ともかく婦長に用件を伝えようと夢中になっていた阿久津は、周囲の情景に初めて目を配った。ここは三方をガラスに囲まれた看護婦室で廊下と広間を、つまり病棟内部を一望でき、丁度拘置所の看守溜りみたいな位置にある。一人の男が廊下の端から歩いてきて、くると踵を返すと、また向うへと歩み去った。こうして往復運動を反復しているらしい。広間のテレビの前に三人が坐りチャンバラ劇を見ていた。片隅では麻雀をやっている音がまびすしい。卓球をやっている人もいる。全体として雑然とした有様のなかで一つの特徴がつかめてきた——つまり、何もせずぼんやり立っている

人、坐ったままの人が多いことだ。肩をすばめ、軽く手をこすったり、全身を震わしたりしつつ、曇りガラスのような目をあらぬ方に向けている。精神病院という興奮した患者が動き回っているものと考えていた阿久津は、物珍らしげに彼らを見た。彼らの中では時が停り、思考は空虚で、何も動くものがないかのようなのだ。おそらく終日放置しておいても彼らは同じ位置で同じ姿勢をとり続けるのではないか。

婦長は患者たちの中に目当ての人を発見できず、机上のマイクをにぎると「水野ヨーコさん」と呼び出しを掛けた。すると廊下の突き当りのあたりに若い女が顔を出した。「看護婦室に来て下さい」若い女は小走りにこちらにやって来た。髪の毛の長い、ジーンズ姿の肉付のよい女性で、二十四、五と見受けられた。

「なあに婦長さん」

「あんだ、おとしの二月、植物公園にみんなで行ったときさあ、写真撮ったでしょう」

「撮った、沢山撮ったよ」

「その時の写真持ってる」

「さあ、随分昔だもんね、どっかに入っちゃったと思う」女は阿久津の存在を気にして流し目で見た。白粉気のない浅黒い頬が、すべすべと光った。細い鼻梁の下に形のよい唇があって、なかなかの美人である。

「こちら弁護士さん。あんだの撮った写真が、何か事件の弁護にお役に立つんですって」と婦長が言った。

「え、弁護士」女は阿久津の真正面に回り、上から下まで見て、両手で頭をかかえた。「御免なさい。保険勧誘員だと思ったの。どこの会社かなと考えていました。水野ヨーコです。太陽の陽」女は頭を